

神戸っ子 昭和40年1月20日第三種郵便物認可 昭和40年2月15日印刷通巻47号 昭和40年2月15日発行 毎月1回15日発行

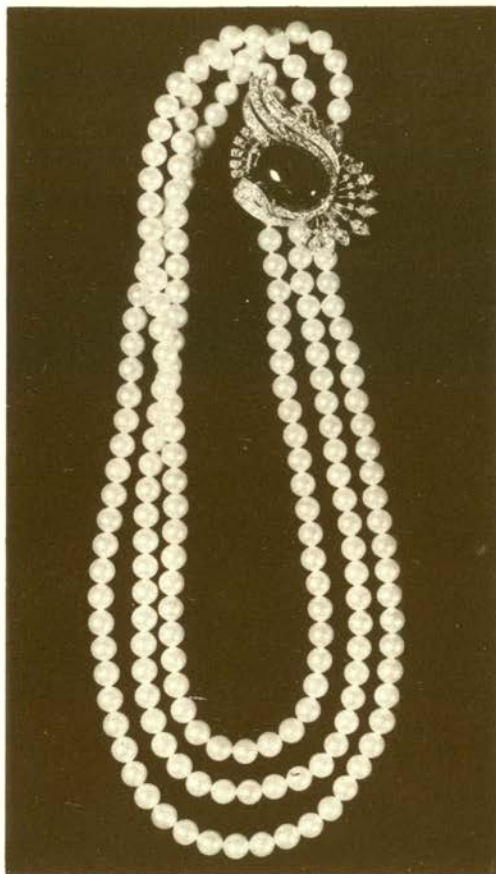
郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

2
月号

magazine kobekko february 1965 no, 47 R150130

MIKIMOTO
PEARLS



世界で自慢のできる日本の宝石は〈ミキモトパール〉です
選びぬかれたつぶよりのミキモトパールがあなたを気品で包みます

ミキモトパール  御木本真珠店

神戸店＝三ノ宮・神戸国際会館 Tel. 22-0062 大阪店＝堂島・新大ビル Tel. 363-0247

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です





あなたの胸に春を
呼ぶタサキパール

田 崎 真 珠

三宮店：新聞会館秀品店内
ニューポート店：ニューポートホテル内

われら
神戸っ子

23

花 黒
隈 田
・ 筆
梶 子
太
郎

花隈の梶太郎さんといえば、踊・歌・三味線と三拍子そろった名妓で花隈の代表選手である。梶太郎姐さんは酒も強い「こんなに寛いでお酒をいただくことは滅多にないことですよ」とおいしそうに飲まれる。お相手役は村田晃子（花隈かの子）さん、若くて島田のよく似合う美人。梶太郎さんは「かの子さんは奇麗でしょう。上品なお酒と一緒に楽しくなるんですよ」とほめそやす。このご両人の盃のやりとりは流れるよう見事なものである。

— 花隈・松の家にて —

撮影 / 西村雅司



◆スターサファイヤ指輪

Tajima
宝飾店 **タジマ**
元町2・TEL 33 0387・2552

われら
神戸っ子

24

川崎重工業 K K 社長
砂野 仁

神戸酒徒番附の新番附が決った。西方（経済界関係）の正横綱に砂野社長が満場一致で推選された。番附審査は酒の品格を第一にしている。砂野社長の酒は、飲めば談論風発、酔へば音吐朗朗の歌になる。じつに爽快な酒なのである。また席が浮き立つように豊かになり和やかな団いになる。興にのれば必ずするのは風林火山の武田節「指揮官は大きな声でやらんと駄目だ」とはっきりした声で歌う砂野社長の酒は新横綱の實録十分というところ。

—— 住吉・砂野邸にて ——

撮影／西村雅司



ごあいさつ
 神戸の港が手にとるように
 美しく見える丘の道、山本通に
 〈ムラタ パール・ショールーム〉が誕生しました
 美しい真珠、優雅な毛皮など
 最高におしゃれな品をとりそろえ
 皆さまのお越しをお待ちしています



真珠と毛皮

ムラタパールショールーム

生田区山本通4-97(市バス停留所前) TEL23-1212-6
 AM. 9.00~PM. 6.00. 日、祝日AM. 10.00~PM. 6.00

♥本誌「神戸っ子」をご持参いただいたみなさまには
 記念品をさしあげます。(S40年3月末日まで)



□ 酒特集 □

2 月 号 目 次

- 1 Second Cover／絵・中西 勝
- 3 グラビア／われら神戸っ子・撮影／西村雅司
②黒田筆子
③砂野 仁
- 9 わたしの意見／雑賀武夫
- 10 随想三題／私の好きな神戸・広瀬礼男／神戸酒徒
番附横綱の弁・朝比奈隆／大関の弁・安倍正夫
- 15 随想／同じあほなら・阪本 勝
- 17 連載随想(1)／やぶにらみ・竹中 郁
- 19 随想／ジェット機で飲み歩くお酒・鴨居羊子
- 23 神戸っ子放談／雀部昌之介
- 26 経済ポケットジャーナル
- 27 オリエンタルホテル・ア・ラ・カルト(その8)
- 28 酒特集 昭和40年度 神戸酒徒番附座談会
- 34 映画のこと手当たり次第⑬／淀川長治
- 36 こんにちわ船長さん／⑨アイランドスキッパー
号(ギリシャ)きく人・玉奥 章
- 39 パリ通信⑥／アルコール天国・佐藤昭年
- 40 Mode of Kobe・福富芳美
- 42 2月の髪・西野 明
- 47 幕しのバラエティ No. 12
- 53 るぼるたーじゅ・コウベ⑦／ジャンジャン市場
松原新一
- 57 座談会／酒は無心に飲むもの・ゲスト桂 米朝
鶴殿礼栄・浅木トミ子・小畑雛子・木村憲吾
- 60 ピンクコーナー(T)
- 62 神戸を楽しむ私のコース⑦／相生智一郎
- 64 神戸遊戯誌18／硬式テニス③・青木重雄
- 66 神戸うまいもん巡礼No.30・赤尾兜子
- 68 紳士入門②／嗜酒紳士・竹田洋太郎
- 70 ポケットジャーナル／花時計
- 72 Kobekko Shopping Guide
- 78 連載第22回／神戸夫人・武田繁太郎
- 82 愛読者サロン
- 84 グラビア／神戸12カ月／深夜の繁華街
岡部伊都子／カメラ・緒方しげを

表紙／小磯良平 撮影／米田昌弘・米田定蔵・レイアウト
橘 正三

KITAMURA PEARLS

世界の人々に
愛される
キタムラパール



北村真珠株式会社

神戸：元町店 TEL (33) 0072

オリエンタルホテル店 331111EXT. 331

東京：スキヤ橋店 TEL (571) 8032

Fachrein's

ドイツ菓子

吟味された材料に
洗練された技術を
加えて“生”の持味
を十分に生かした
お菓子です。

バウムクーヘン
(ピラミッド)

ビスケット
各種ケーキ
各種詰合せ

ユーハイム

本店・三宮生田神社西隣
三宮店・大丸前市電筋
神戸そごう・神戸三越・神戸大丸
国際名菓・その他有名百貨店

＊わたしの意見

夢をさそう

神戸の個性

雑 賀 武 夫 NHK神戸支局長



山を切りくづして海を陸地にするということは、人間の一つの素朴な夢であった。だから現実になんかをやっているのを見ると一種の快感を感じる。

その土の運搬も、風致をこわさないために地下を通して聞いたり驚いた「やればやれるものだ」と思う。神戸はやがて「人工島」も造り上げるだろう。まるで狭い日本の領土がふえて行くようで気分がいい。

ここにも神戸の個性があるように思う。

ちかごろは、思いに思って遠方へ旅行しても、みやげ物店では「コケシ人形」だけしか目につかない状態で個性がなくて、つまらない。

そして、どこへ行ってもあるのは「観光協会」である。

神戸へ来るまで大阪、京都、名古屋、東京と各地を動め歩いたが、どこへ行っても〇〇まつり、から芸術祭に至るまで、新興のまつりの多いこと。

みな結構なことはいうまでもない。

けれども個性がほしい。まつりそのものに個性を出せというのではなく、どこもやっていない特異な事を作ったと思うのである。そうでなければ発展性はない。

神戸の経済界は地盤沈下になやみ、神戸は文化の育たない所だとさく。しかし神戸には、どこにもない夢を描いて、それを実現させる力がある。

どこもやっていないものを創造して行きたいものである。

たとえば、神戸には、神戸を服飾界の世界的メッカにできる素地がある。デザイナーや業者が神戸と関係せずして仕事はできない、というほどの都市にできる可能性を宿している。

手近なアジア諸国はもちろんのこと、世界各国のデザイナーや業者たちが、神戸詣でに雲集してくる日を私は夢みている。

神戸に来て二年目を迎えたことになる。神戸とは何んとなく縁がある。私は思っている。戦前、いまから四〇年も以前、この神戸の町に何カ月かいたことがある。少年時代なので、記憶は曖昧なのだが懐かしく思い出される。ネオンの輝やくハイカラな神戸の町

り市電に乗って神戸を一周したり、案外に行動範囲が広いので、やはり、相当脱白であったと思つては苦笑している。私の祖父が、新開地で三友堂というお菓子屋をやっていたというから、神戸につながりがあったのだろう。

北野町から諏訪山にかけての異人館風景には、いちばん心をひかれる。外人独特のゆったりとした歩きに見とれたり、楽しげに話しながら歩く何処かの国のアベックなどに会つたりしながら歩くと坂道のあい間に突然、街並が開らけ、船が浮かんで見えたりするのは、神戸ならではのところであらう。

私の好きな

神戸

広瀬礼男

(絵と文)



異人館は庭が南側にゆっくりとつてある。坂に建てられた館から神戸の街並や、港のうつり変りを楽しんだのであらうと思われる。私は日曜画家という程ではないが、スケッチブックは手から離さない異人館風景は出来るだけスケッチしておきたい。先日風見鳥のある異人館を訪ねたが、あの北野天神からの坂道の風景はぜひ描いてみたと思つている。

ハンター邸は会社にかよう通りすがりに移転されているが、やはり北野町あたりの古ぼけた異人館のほうが味わいが深いようだ。

ただ、北野町附近それも目抜のところ、けばけばしいホテルが続々と誕生している。とても絵にはならないし、どうにかならないものかと思つている。

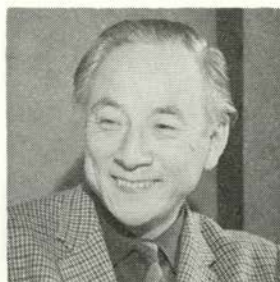
は少年の夢を満してくれた。不思議なことに、新開地界隈の思い出ばかりである。錦座や朝日館、松竹座、相生座、聚楽館など映画館ばかりが浮んでくる。少年の頃だから遊ぶ所にしか用がなかったのであらう。湊川神社に鳩が群がっていたり、大倉山に駆け登った

神戸の山手附近から熊内、六甲にかけての住宅地は、東京の山の手とはまた異つた趣きがある。規模はとにかく家の石垣がやたらに立派なのに驚く。恐らく石に不自由はしなかったであらうが、腰の座った構えである。それに坂道が多い。

(松下電器産業K・K

神戸営業所々長)

最近、相撲の横綱もよく負ける。それと似たようなもので酒の方でも決定的な横綱がいなくなつたような気がする。なくなつた横山大観先生などは、ごはんを食べないで酒ばかり飲んでおられたというからこういう人をこそ、真の横綱、酒仙といふべきであらう。左手に酒盃を、右手に筆をもつたという先生の大陸的な風格がすばらしい。山田耕筰先生も豪傑酒といふべきで、実は私が先生から最初にご指導をうけたのは、酒



神戸酒徒番附 横綱の弁

朝比奈 隆

に酔わないための方法であった。先頃なくなつた杉道助さんも大へん立派な酒であった。そういう方々に比べれば、私などはとうてい足もとにも及ばぬ小型の横綱にすぎない。ただ私には、昔の酒仙といわれる人々への憧れがあり、その風格をかつこうだけ真似てい

るのである。

私はよく酒に強いといわれるが初めから強いわけではなかった。ビールを3杯ほど飲んで、頭が痛くなるほどだった。私が多少なり

とも酒に強くなつたといえるのは30才を過ぎてからのことである。満州にいた頃、ロシア人の宴会にしばしば招待された。ロシア人には、日本と同じく献盃の習慣があり、しかもそれがほとんどウオッカの献盃である。鄭重を極めた献盃で、こつちが飲み終るまで目の前にじつと立っているのだから、どうしても受けないわけにはいかない。飲み終って、そのままぶつ倒れたことが何べんあつたかわからない。だが、それによって私が

ずいぶん鍛えられたということは確かである。努力しなければ、酒に強くなることはできないのだともいえる。

世界各国のアルコール消費量を、統計で見ると、文明国では日本はかなり下位である。一位はベルギーで、二位がアメリカである。ちょっと考えるとロシアやドイツがトップのように想像されがちであるが、実はそうではないのだ。フルシチョフがどれほどの大酒飲みだったか知らないが、ロシ

アではあまり酒を飲めない階級があり、そのため国全体のアルコール消費量はそう多くはないという結果になるのだろう。お酒は、国民ひとりひとりが老若男女、階級の区別なしに少しずつたしなめるようになるのが理想である。家庭においても、夫と妻が、親と子がともどもにたしなむのがいい。みんなが平均して少しずつでも飲むようになれば生活は豊かに、楽しくなり、お酒における民族としての風格も自然に生れてくるのではなからうか。そこで私は思うのだが、アルコールの消費量が一国の文化ないし文明の進歩を測るバロメーターだとはいえないか。また、女性がお酒を飲まない、あるいは飲んではいけないみたいな妙なモラルがあるのも、おかしいことだと思う。こういうモラルは日本だけのことではないか。それに、酒を飲むと頭が悪くなるなんていう人もいるが、あれは嘘だと思う。前の阪大学長だった正田健治郎教授は、私などとは比較にならぬほどケタ違いにお酒に強い方であるが、つねに頭脳明晰、堂々たるお酒である。酒を飲んで頭のボケる人は、はじめからボケているのである。ともあれ、お酒の飲めない人とは私はつきあわない。つきあおうにも、話が合わないからである。(指揮者)

「神戸っ子」の酒徒番附で私が大関に推せんされたそうです。そこで大関の弁を求められたわけですが、どうも弱りました。私はもう引退のがわたしと思っていましたから。それに最近、酒品もかんばしからず、たぶん年のせいだろうと思っっているくらいですから、大関といわれるとなおさら恐縮しないわけにはいきません。

酒の思い出という、やはり郵便会社に勤めていた頃のこと、



神戸酒徒番附

大関の弁

安倍 正夫

いったのですが、さすがに最後には酔いつぶれてしまい、船員に肩をかかえられて船に戻るというていたらくでした。翌朝、目が醒めるまで、なにがどうなったのかさっぱりわからなかったというありさま。

地酒のうまさ——これはもうあらためていうまでもないことです。が、その土地土地で造られた地酒のうまさを味わうのも、外国を旅した者の楽しみのひとつでしょ

あいているホテルに泊ったのですが、なんとそこが酒の飲めないホテルだったのです。今はどうなっているか知りませんが、その頃は酒を出してもよいという許可をとっているホテルと、そうでないホテルがあって、運悪く後者のホテルに泊ってしまったというわけです。本場に行つてウイスキーが飲めなかったのですから、残念の上もない経験でした。

ウイスキーにはだいたいふたつの味があつて、スモーキーな味のもの、とそうでない味のものがあつたのですが、私はスモーキーでない方が好きです。これをロンドンウイスキーとも呼んでいます。ドライマテニー（カクテル）——これは横浜の西本さんという方の招待をうけた席で、はじめて飲ませていただいた——も、ジンのくせとベルモットのくせがぬけていて大へん好きです。ウイスキーのジョンヘーグも好物で今も一本だけ大事にしています。

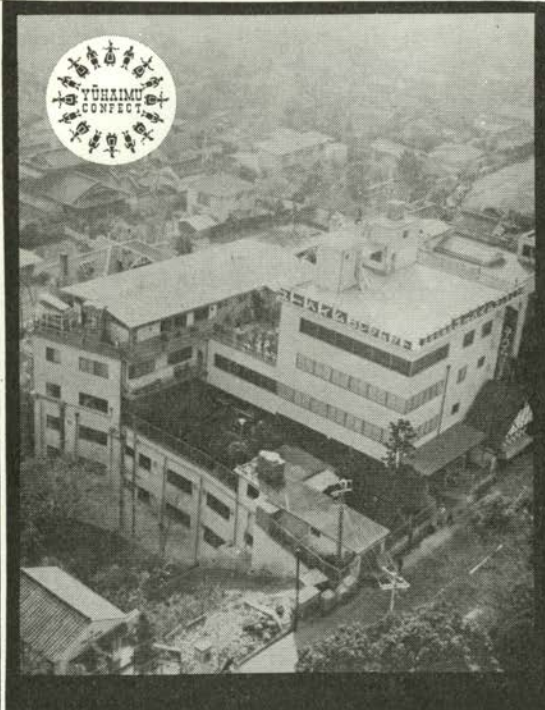
最近、家で飲む酒が非常においしくなりました。直燗でちびちび飲むのもなかなかいいものです。熱燗は好みませんが、自分で適当な温度にあためて飲むのが今は好ましくなりました。

（オリエンタルホテル社長）

まづ先に楽しく思いかえされます大正時代のことで、入社するそうに船でアントワープに行きました。アントワープの海岸沿いに主に船員相手のバーが数十軒、ずらっと並んでいました。なかに、東京バーとか大正バーなんていう名前のついたバーもあったくらいです。その時に、無茶な話ですが、そこに並んでいるバーを一軒一軒訪ね、はしからはしまで飲み歩きました。ビールを一本ずつ飲んで

う。特に、イギリスに行った時のことです。ビールにもいろんな種類があつて、それがそれぞれの土地で、村や町によつて味が違つていのです。私にとつて、今でもそれは楽しい思い出のひとつです。

スコットランドのグラスゴーに行き、クイーンメリー号の進水式に出席した時のことも、忘れられません。昭和12年のことです。町のホテルがどこも一杯で、やつと



北欧の銘菓

ユーハイム コンフェクト

本社・工場 / 神戸熊内町一丁目(市立美術館東隣) TEL / 22-1164・9865
三宮店 / 神戸三宮生田筋(階上喫茶室) TEL / 33-7343・0156・4314
神戸 / 大丸店・阪急店・鉄道弘済会

MAC



若い人
若い生命
若い情熱

若人の服飾



三宮本店 神戸センター街
TEL 〇895
センター街西口
TEL 〇896
新聞地本通り
TEL 〇7688
姫路駅デパート
TEL 〇1261



高級ヘヤートニック
オード・コークス

発売元 医薬の

三 星 堂



冬のチャームポイント
'65新型ウインターグラス



神戸眼鏡院

元町3丁目 ☎ 3112 ☎ 1443

☎ 0551 (貿易部)

□随想□

同じあほなら

阪本 勝

きみは酒が好きかと問われれば、好きだと言下にこたえる。酒のみの令名天下に高きものを、きらいだとも言おうものなら、山のカラスが笑うだろう。いや、台所のとっくりが吹きだすだろう。ところでおれはいつたいいつごろから酒をのみはじめたのだろう。めずらしくわれ、追憶の糸をたぐる。

あのころ、あの山に桜が咲いていた。仙台第二高等学校一年生のときである。ハインネの詩集をたずさえて花辺を逍遙していると、樹下に小宴をはっている級友にであった。

「おい、サカモト、本ばかり読んでいないで、まあいっぱいやれ」

と、後年北海道の旅役者に落ちぶれた岡田という友達がさかずきをさした。ぐっとのんだが苦かった。べっと吐いてその場を去った。幼ないころ母の実家が造り酒屋だったので、たわむれに、ひしゃくで酒をのんで危うく昇天しかけたことがあ

るが、ものごころついてから酒なるものをのんだのは、これがはじめである。数えどし十九の春であつた。

それからきょうまで、ずいぶんきこしめしたわけだが、このごろつくづく思うのに、酒なんていう、あの苦い、渋い、はかない液体を、なぜ執念ぶかくすすりのむのだろう。われながら、あいそもこそ月の夜だ。それならば、やめればいいではないかと思うこともあるが、そのとききまつて頭に浮ぶのは、酒のまぬともがらの、あの顔つきや、そぶりや、ものの言いかただ。

思いみるだにうとましけれ。

「どうも不調法でして……」

なんてぬかして、頭をかくでもなし、ひげ撫でるでもなし、ほしょんと坐ってけつかるぶざまなかつこう。あれで男といえるかいな、と、さかづきをぶつつけてやりたくなる。それで、たべるものだけはガツカツくらいいける。話題といえ

ば、定年のこと、恩給のこと、株のこと、孫のこと、エトセトラ。

まるで、ぼくの軽べつの対象になるべく眼前に現われたようなやつだ。それをさかになに、ぼくはハイネの北海吟を口ずさむ。片や盃を傾け、片やそろばんをはじく。われは明日を知らず、かれは後途を策す。われは談論にたわむれ、かれは計算にふける。われは天国に遊び、かれは奈落に墮つ。

まあ、考えてもみたまえ。不調法組のいかに味気なく、くだらなく、オモロないことよ。話をしてもかんびょうのように乾いているし、笑うことがあっても、声に音色があるでなし、コチラがユーモアをとばしても、五分すぎてニヤリとすればいいところ。おぞましきこといわんかたなし。

だから下戸と机をはさむほどしんの疲れるものはない。打てどひびかず、ざぶとんばりの太鼓をたたいているようなものだ。ぶすん、ぼそんと音がする。そればかりか、ときどきあくびして、もう帰ろうや、なんてぬかしやがる。帰りたければ、さっさとひとりでお帰りあそばせ。

ぼくはいわゆる酒のみというものはきらいだ。酔っぱらいはまっぴらごめんだ。酔うてくずれない清興のほどこそこのましい。はばかりながらぼくはこの限界をまもっているつもりだ。ぐでんぐでんや、へべれけは酒徒の風上におけぬやつである。酒徒たるエチケツトを心得ているかぎり、酒のある人生の方が酒のない人生にまさること、はるかなりだ。

踊るあほうに見るあほう

同じあほなら踊らにや損そん

ともいうではないか。酒をのむのもあほう、のまぬのもあほう。同じあほならのむほうが気がきいている。酒をのまぬ一生は、息があるだけのことだ。生涯じぶんの意識からぬけでることができない。それにくらべて、酒のむともがらは、たとえしばらくのあいだでも、じぶんの意識からぬけでることができ。これはうれしく、たのしいことではないだろうか。酒をのんでいると、つい慈愛心が浮びでてきて、貧乏な友人に金がりたくなる。からっぽの財布の底をはたいてでも、盃中の仁、貧乏の底に生きなずんでいる友に金をおくることがしばしばある。あとからしまったと思うこともあるが、結果的には善行をほどこしたのだから、じぶんをほめてやるべきだ。酒中の興、ときに昔の恋人ののろけ話を女房にして、しまったと思うこともある。が、これとても、酒のおかげでじぶんが正直な善人になったわけなのだから、決して悪いことではない。また、いっばいきげんで亭主ののろけをきかされて怒るようなやぼな女房にも仕立てていない。これもなが年酒中で訓練したたまものというものか。

これを要するに、ぼくは酒の半生を決して悔いてはいない。酒はぼくに冒険の趣味を植えつけ、空想とまぼろしを教えてくれた。つまり「自己意識」という、このやっかいな劫を忘れさせてくれた。ああ、わが母。酒造家のひとりむすめに生れたまいて、幼なきころより、わが子勝に、酒の香りをかがせたまへり。おかげをもちて半生酒を忘れず。頌すべし、念すべし、合掌。

(随筆家)